

IV 総合的考察及び今後の課題

本年度の取り組みは、概述すれば以下の3点について成果があったと考える。

1つは、主題に対するからだづくりの位置づけの問題である。我々の目指す「からだづくり」は、単に優れた体位・体格や運動機能を備えた児童生徒を育成することをねらっているのではなく、個々の児童生徒が直面している発達の、社会的課題を達成するための基盤づくりとして行っているものである。従って、身体ができればそれで良いというものではなく、その身体をどのように使っていくのかという意志や意欲も合わせて育てていくのだということを改めて共通理解したことは、取り組みを見直す上で意義あることであった。また、それに伴って3学部が共通した研究の構想図を作成したことは、研究を進める上で大きな1ステップとなった。

2つめは、3学部の連関を考えながら、発達を踏まえて、各学部の目指すからだ像を設定したことである。児童生徒の発達段階、暦年令によって、「からだづくり」のねらい・内容は異なってくる。児童期と青年期を比べた時、「からだづくり」のねらい・内容が異なるのは当然であろう。精神発達や身体的発達を踏まえた上で、目指す児童生徒像を設定したことは、3学部の取り組みに連関もたせることとなり、昨年までの研究をさらに前進させることとなった。

3つめは、主たる取り組みの場を生活場面に移行させたことをあげることができる。昨年度の取り組みの場は、全体的な傾向として、体育（保健体育）、養護・訓練など運動場面が主であった。本年度は昨年度の成果を基に、身体ができた児童生徒がどのようにその身体を使っていくのかという意志や意欲を重視して、生活場面での取り組みを主として取り上げた。具体的には、小学部では「遊び的要素の強い表現活動」、中学部では「遊び的労働」、高等部では「労働」を通した「からだづくり」が、生活単元学習、作業学習の中で実践されてきたのである。その結果は、実践で述べられている通り、身体のみならず、取り組み意欲の向上にその成果をみることができた。我々は、精神と身体のバランス良いからだづくりを求めているのであり、その趣旨から考えれば、生活場面での取り組みは意義があったといえる。

さらに、今後の課題として、次の3点を挙げることができよう。

1つは、教育過程の再編成の問題である。各学部とも、養護・訓練、作業学習など帯状の時間帯を確保するなど工夫を凝らしているが、さらに「からだづくり」を前面に据えた教育過程を編成することが必要であろう。また各々の教科・領域の内容の精選、組立の工夫など検討していく必要がある。

2つめは、共通の取り組みの場における学部間の連携である。共通する取り組みの場があれば、学部の壁を越えて、共同で教材・指導法について検討していかなければならないと考える。

3つめは、生徒実態の把握・評価のメジャーの問題である。社会的自立、からだのこなし、取り組み意欲などについてもっと客観性のもてるメジャーが作れないか検討していく必要がある。

遅々たる歩みではあるが、積み重ねを大切に、研究をさらに発展させていきたいと考えている。